

ザンビア便り第30回「西部州等訪問」

5月中旬、私はザンビアの西部州に出張した。今回の目的は農業ビジネスの実態をみることにあった。

まず、ルサカから2時間ほど走ったところにある、アマテオン農場を訪れた。この農場はドイツ企業のアマテオンにより3年ほど前に開かれたものだ。ムンブワの町の幹線道路から50キロほど奥に入ったところに4万ヘクタールの農場が広がる。まだ開墾されていない土地も多く、ビジネスが本格的に始まっている訳ではないが、大規模灌漑設備も入れられ、さらにダムを2カ所、井戸も掘っており、灌漑に使うということだった。魚の養殖も視野に入れており、灌漑用のプールではティラピアが泳いでいた。



アマテオン農場でのメイズ収穫風景
(遙か遠くに大型の収穫機が動いていた)



アマテオン農場のセンターピボット灌漑
(1つの設備で約80haに灌漑ができる。)



アマテオン農場の灌漑用プール
(黒く見えるのがティラピアの稚魚)



アマテオン・アグリザンビアの関係者と記念撮影

農場ではメイズ、小麦、大豆の作付けが開始されており、今後は自前の家畜飼料も生産し畜産業も始める計画とのことだった。農場で働くワーカーは周辺の農民たちで、女性も含

め200名ほどが雇用されている。事業の開始以来一番の課題はワーカーたちの教育、訓練だったそうで、遅刻をしない、無断欠勤をしないなど労働倫理を教え込むことに苦労したそうだ。また、ザンビア、特に農村では女性は自分の畑で働く以外は家で家事をするのが通常で、ワーカーの募集をかけても女性が応募してこず、女性を雇うために地域の伝統的指導者のところに行き説得したこともあるそうだ。ドイツの企業らしく、きちんと労働者を働かせるよう指導しているところは、日本人には共感する。

今後の課題としては、幹線道路からの50キロほどのアクセス道路だろう。何しろひどい悪路で、これでは農産物の搬出にも苦労すると感じた。

翌日はカオマという中規模の街の近郊でたばこの葉の栽培を行っている日本たばこ（JTI）の子会社であるJTIザンビアを訪問した。JTIはここ西部州と東部州のチパタでたばこの生産を行っているが、カオマでは4千人の農家と契約して、彼らの栽培したたばこの葉を買い取っている。大きな集荷場も最近完成し、我々が訪れた時には大勢の農民がたばこの葉を大量に持ち込んでいた。この集荷場で、すぐに格付けが行われて、農家にはすぐに現金で支払われるということだった。専門の格付け人がおり、手際よく値段をつけていた。



JTI ザンビア社カオマ集荷場



工場内には、農民から集められたたばこの葉がぎっしりと並べられていた。



たばこの葉の格付け風景



自分の葉の格付けを待つ農民たち

J T I は農家に対して種、肥料、農薬などローンで提供、農民はたばこの収入から返済する仕組みになっている。さらに、農民に対する栽培方法や収穫後の養生（小屋で蒸すこと、これによって品質が左右されるそう）のやり方まで丁寧に指導している。さらには J T I は地域住民のために学校を建てたり、養生に使う木の植林活動を行うなど環境にも配慮したビジネスモデルを構築している。



たばこ農家を視察。農民はたばこ栽培に非常に満足しているとのこと。
（見えているのは養生用の小屋）



養生小屋の中の様子
（足元にあるレンガのトンネルを熱気が通る。）

この二つの農業ビジネスに共通することは単に農産物を作って売るだけでなく、付加価値をつけたり、技術を農民に伝えたり、さらに地元の雇用創出、福祉の増進をも含めた総合的な取り組みであるということだ。まさに、このようなビジネスモデルが真に意味のある持続的プロジェクトなのだと感心した次第だ。

最後に西部州モンゴ周辺の穀倉地帯を夕方訪れ、稲を栽培している農地を視察した。ここには日本が20年ほど前に無償援助で作ったセフラ大規模灌漑がある。場所によっては修復が必要なところ、周辺の砂が大量に入り込み浚渫が必要ではあるが、周りには広々とした農地が広がっていた。ザンビアは広大な土地がまだまだ残っている。ここに、日本の技術、それも持続可能で技術移転が伴う形でさらに入れていき、ザンビアを南部アフリカの農業大国にしていくべきだと沈んでいく大きな夕日を眺めながら考えた。



農地の間を流れるセフラ灌漑
（1998年に完成）



黄色く色づいたザンビアの稲穂



駐ザンビア特命全権大使
小井沼紀芳